

## 令和2年度第2回レブンアツモリソウ保護増殖検討会 議事概要

### 1. 概要

(1) 日 時: 令和3年3月2日(水)9:30~11:40

(2) 場 所: 環境省北海道地方環境事務所 会議室

(3) 出席者:

○検討委員(五十音順)

河原孝行座長/北村系子委員(ウェブ参加)/幸田泰則委員/志村華子委員/八巻一成委員

○関係行政機関

北海道森林管理局計画保全部計画課/北海道森林管理局宗谷森林管理署  
礼文町産業課(ウェブ参加)

○オブザーバー

北海道環境生活部自然環境課、NPO 法人礼文島自然情報センター

○事務局

北海道地方環境事務所  
株式会社地域環境計画北海道支社

### 2. 議事概要

河原委員が座長に選出され、河原座長の議事進行のもと、議事1として「レブンアツモリソウ保護増殖ロードマップ中間評価について」、議事2として「次年度以降の取組み内容および検討課題について」、議事3として「その他」議論が行われた。

委員からの主な意見、質疑等は、次のとおり。

#### 議事1 レブンアツモリソウ保護増殖ロードマップ中間評価について

##### ◆自生地の評価

- (委員) 全体的に、個体数をササ等の刈払いで増やす、衰退していた個体群を新たに活性化するという技術は確立した。ただし、種子発芽、実生の環境づくりを含めたライフサイクルを回していくという点ではまだ不十分。
- (委員) 鉄府保護区については、非常に色々な事業がうまくいっている。減少はある程度食い止められているが、現状維持が重要である。
- (委員) 鉄府保護区、レブンアツモリソウ群生地および船泊保護区といった群生地は、十分復活している状況ではなく、どちらかという減っている状況。
- (委員) 船泊保護区の群落は消えていくと考えていたが、刈払いにより大きく回復した。ただ、植え戻し株の扱いが厳しすぎるのではないか。共生発芽の技術を苦労して確

立し、培養株を育成して自生地へ植え戻したものである。結果したものを摘み取ると植え戻し個体のライフサイクルが確定しないのは問題である。

- (委員) レブンアツモリソウ群生地向かいは、新たな個体が復活してきた、少し増えてきたというレベルのため、今後の推移をみていく必要がある。
- (委員) 幌泊地区など個体数の少ない地区については、今後の管理方針が定まっていないのが課題。
- (委員) 南西海岸は、当初に比べるとかなり色んなこと分かってきた。一方でササの侵入もあり、レブンアツモリソウ以外の高山植物の保全も含め総合的な管理を今後検討していく必要がある。
- (委員) 南西海岸で増えてきていることは、観光客に見せるという観点ではすごく良いことで、レブンアツモリソウを多くの方に知ってもらい、観光資源としてもっと注目してもらおうことが礼文島にとっても良い。今後は、保護区などでは守りつつ、見せられるものは積極的に利用していくということではないか。

#### ◆盗掘防止・普及啓発

- (委員) 今までの長年の成果により非常に良い結果である。
- (委員) 人のつながりが重要なので、情報交換等を定期的に行っていくべき。また、保護の意識を維持できるような体制、リーダーの育成も重要。

#### ◆人工培養

- (委員) 培養については人材確保・人材育成といった人的な苦勞が多い。今後は、計画的な培養植栽管理を立て、人とお金を増やすことも必要。
- (委員) 培養センターでの取組みは大変うまくいっている。

#### ◆今後への提言

##### ○管理等の方針整理

- (委員) 今後、自然の推移にゆだねる場所と、積極的に手を加える場所を決めるような方針も必要。色々な選択肢が考えられるため、アダプティブに、状況を見ながら柔軟に多様な方向性、多様な選択肢を検討すべき。
- (委員) 自然の推移にゆだねる場所の候補としては、群生地が挙げられるが、具体的な場所を現時点で決めるのは困難であり、逆に見せるために積極的に手を加えていく場所をどこにするかという視点から考えていく方が整理しやすいかもしれない。
- (委員) レブンアツモリソウの生育には地滑り等の自然的攪乱、山火事等の人為的攪乱が大きく影響していると考えられる。人為的攪乱のある場所も積極的に保護増殖事業の対象地として位置付けて然るべき。また、どういう条件がどういう影響を与えるのかもみながらモニタリングをしていくことが重要である。
- (委員) 過去の検討会でも議論されてきたが地滑りは実生の発生等に効いていて、刈り払いは元々生育する個体の回復に効果があることが分かった。攪乱にも色々な意味合いがあるので、うまく組み合わせながら行うことが重要である。

(委員) 試験的に人為攪乱を起こす試験も検討してはどうか。

○植戻し個体の取り扱い

(委員) 植戻し個体の取り扱いについては、周囲に異常がないことを確認しながら進める前提であり、植栽後定着するかの確認が第一の目的であった。

(委員) 植戻し個体は、自生地で何年も生育しており、共生菌がついているか調べてみたい。そういうことに植え戻し個体を活用することもあるのではないか。

(委員) 培養株については、発芽率も上がってきているが、共生菌は変異が激しく長年継代培養すると共生発芽力が落ちてくる。このため、定期的に自生地から共生菌を採取することも必要になるのではないか。

(委員) どんなリスクがあるかを評価したうえで、植戻し個体による事業をどのように進めるかということは、来年度以降のロードマップ改定の中の大きなテーマである。

○モニタリング調査

(委員) モニタリング調査による調査圧が特に実生に対して影響が大きいと、これまでのモニタリング成果によりある程度の推移がわかってきた箇所は、リスクを避けるため調査を終了したほうが良い。

(委員) モニタリング結果から、今後レブンアツモリソウが発生しない場所かどうかを判断することは難しいが、その環境が変わることもあるので地点の整理をしつつもモニタリングの継続は必要である。

(委員) ドローンを使った影響の少ない調査方法の導入も検討すべきである。

## 議事2 次年度以降の取組み内容および検討課題について

### ◆次年度以降の取組み内容

(委員) 盗掘防止対策に係る関係機関の連携はどうか。

(礼文町) 北部では、観光シーズンに3機関(環境省、林野庁、礼文町)からそれぞれ1名の計3名が話し合いをしながら協力して対応している。

(委員) 幌泊について、管理者に対して、レブンアツモリソウに影響のない刈り取り時期の提案をすべき。もっと回復が見込める。

### ◆ロードマップの改訂に向けた検討課題

#### ○個体数カウントモニタリング

(環境省) 今後のモニタリング結果を評価するために、カウントの単位・モニタリング方法を統一していきたい。来年度の重点的な課題の一つであると考えている。

(委員) 個体数のカウント方法については、茎数になるのでは。株の判断は難しい。

(委員) かつてデータを集める際に、どういう単位に基づくか議論になった。そのあたりの整理を振り返るとともに、過去のデータとの比較も行えるよう項目別の出し方もうまくできるように整理できると良い。

### 議事3 その他

- (礼 文 町) 国有林での再導入を行った場合、生育地改善のための掘り起こし等の行為は可能か。
- (林 野 庁) 国有林は基本的に保安林に指定されており、再導入の際の掘り起こしについては許可行為にあたり申請が必要になる。再導入が国有林内で可能であるか都度、相談しながら判断していきたい。
- (オブザーバー) レブンアツモリソウの生育状況の良し悪しを判断する指標はあるか。
- (委 員) 指標としては、大きな個体から実生等小さな個体まである L 字の個体数分布になる状態が望ましい。また、ある程度広い範囲での個体群動態を合わせてみることも必要である。
- (委 員) レブンアツモリソウに関連する研究成果についても、検討委員が交代していることもあるので、簡単にレビューしておく。